



[上] 教員それぞれが、授業のどんな場面でデジタル教材や体験を取り入れるか計画を作った
©Save the Children
[下] 授業を受ける子どもたち。デジタル教材を使った授業を午後に実施することで、児童が途中で帰るのを防ごうとする学校も

には政府の予算や教員支援の仕組みが不十分だったり、教員のキャリアパスティーが不足していたりと、活動を継続させることが難しかったのです。そう振り返るのは、同社サステナビリティ推進本部社会環境室CSRグループの赤堀久美子さんだ。13年からは、企業との連携により低所得者層向けビジネスを促進するJICAの事業も利用し、将来の事業化を視野に入

れて、新たな取り組みを開始した。
映像を使って授業を楽しむ
活動の中心は、映像と音声を使ったデジタル教材を制作すること、それを活用した効果的な教え方を伝えること、そして、実際に教室でリコーのプロジェクトを活用して授業を実施することの3点だ。首都デリー、ビハール州、

テランガナ州（当時はアンドラ・プラデシュ州）の3地域から各10校、計30の公立小学校を対象とし、ニーズ調査や教員研修、模擬授業と包括的な活動を通して教育の質の向上を図った。
「映像を生かしたデジタル教材は、理科での人体の構造や水の循環など、教科書だけでは理解しにくい内容を教えるのに適しています。また、ただ映像を見せるだけでなく、体験型の簡易実験キットなどとも組み合わせることで、学んだことを実生活に生かせるように工夫しました」
インドの農家では、繁忙期になると手伝いのために子どもを学校に通わせない家庭もある。プロジェクトがこだわったのは、子どもが家で授業の話をしたり、学校で得た知識を生活の中で役立てたりできるようにすることを通じた、保護者の啓発だ。
さらに、「使いやすさも重視しました」と赤堀さん。機器の操作はもちろん、どういう場面でどんな映像を見せるべきなのかを理解して授業を行うことが教員にとって望ましいとの考えから、教員自ら映像のコンテンツも作れるよう研修を行った。コンピューターを扱うのも初めて、という参加者もいたが、現地地方政府の教員研修担当部署と協力して指導する中

で、次第に、簡単な動画の編集などでもできるようになった。
2年間のプロジェクト期間中に実施した模擬授業では、回を重ねるごとに、映像の内容が向上し、実験や体感する内容もうまく取り入れられるようになっていった。
インドでは、先生が一方的に話す授業が一般的だったが、模擬授業は動画や実験に加えて先生の質問も増え、子どもたちに「楽しかった!」と大好評。何より教える側の教員も生き生きし始め、授業が活発化した。
今年8月にテランガナ州で行われた最終報告会では、転勤先からわざわざ駆けつけて同プロジェクトの成果を発表してくれた教員もいる。さらに、模擬授業の評判を聞いて、子どもを私立校からプロジェクトのある公立校に転校させた保護者もいるという。
「私たちCSR部門では、持続可能な開発目標 (SDGs) の採択を受け、今後、自社の事業を通してどう社会に貢献できるか、改めて議論しているところです。インドで現在のプロジェクトの事業化を目指すとともに、これからも事業部と連携して、社会の課題に取り組んでいきたいと思っています」。そう語る赤堀さんは、SDGsをベースに社内を、そして社会をつ

テランガナ州で保護者にヒアリング調査をする赤堀さん (中央)
©Save the Children



子どもたちのころ、ビデオ教材を使う授業が楽しかった人は多いのではないだろうか。教室中の子どもたちが真剣に映像を見つめるその目の輝きは、きつと世界共通だ。そんな「楽しい授業」の喜びが今、インドに芽生えつつある。
株式会社リコーは、コピー機やプリンターなど、オフィス向けの画像機器やソフトウェアなどの製造・販売を行う企業で、現在およそ200の国と地域で事業を展開している。同社では、ミレニアム開発目標 (MDGs) に対して企業として何ができるかという議論を経て、「本業を通じた」社会貢献と自社の成長の両立を目指し、2011年からインドの貧困層向け教育支援を始めた。
インドは、教育のアクセスや授業の質など、多くの課題を抱えていると同時に、市場としての期待も大きい。リコーは当初から、世界で子どもの支援活動を行う国際援助団体「セーブ・ザ・チルドレン」と連携し、同国地方部の小学校で印刷機を活用して、教育の質の向上を目指した。
「社会的課題が多くある地域でしたから、支援を展開する意義は大いにありました。ですが、実際



プロジェクターは停電の多いインドでも使いやすいよう、バッテリーの活用方法なども検討中。映像や実験キットを使うことで、先生と児童のアイコンタクトも増え、双方向の授業になった



from **India** インド

教員が一方的に話す授業が多く、教材や実験機材なども不足していて、分かりやすい授業の実施が難しいインド。そこで、日本の民間企業が自社製品のプロジェクターを活用し、インドの教育の質を高める試みを行っている。

世界の学び舎に分かる喜びを

